

## 文化講座「特殊研究講座」一覧

### 平成 17 年度実施（生活文化学科）

4 月 25 日（月）「ものづくりの思想」	ものづくり大学学長 野村 東太氏
5 月 16 日（月）「昭和のくらしと家具」	昭和のくらし博物館館長 小泉 和子氏
5 月 23 日（月）「プロダクトデザインについて」	プロダクトデザイナー 上村 正人氏
6 月 20 日（月）「富士山から日本を変える」	登山家 野口 健氏

### 平成 18 年度実施（生活文化学科、文化創造学科）

5 月 31 日（水）「オリンピック水着開発の歴史」	ミズノ株式会社勤務 松崎 健氏
6 月 7 日（水）「三池 崇史の仕事」	映画監督 三池 崇史氏
6 月 14 日（水）「うたの心」	詩人 大岡 信氏
6 月 28 日（水）「ユニバーサルデザインの現在」	建築家 川内 美彦氏

## 教員学術研究会（平成 17 年度）

2006・3・31 作成

平成 17 年 6 月 1 日

漢字と諺文（おんもん）・仮名

### 一近代朝鮮（韓国）と日本における固有文字をめぐる言説一

生活環境学科助教授 李 守

現在、韓国語の表記は 1989 年に告示された『ハングル正書法』にもとづいている。一方、日本語の表記は 1946 年の『当用漢字表』および『現代かなづかい』によって、その骨格がさだめられた。韓国語が漢字を基本的にもちいないことを原則としているのに対して、日本語は漢字とカタカナ・ひらがなを交えて書く。近代以降、朝鮮と日本では、ともに漢字が近代化の障害となっているとの意見が一定の支持をえていた。くわえて、民族固有の文字が、眞書としての漢字に対する諺文（俗な文字）、眞名としての漢字に対する仮名（仮の文字）とよばれていた点も共通する。日本の植民地支配をうけた朝鮮、中国との戦争に突入した日本では、ナショナリズムの昂揚を背景にして、民族固有の文字に与えられた「屈辱的」な呼称を改めようとする運動がくりひろげられた（1930 年代のハングル運動と 1940 年の大政翼賛会）。作家、学者らをまきこんで展開された、ふたつの文字礼賛運動をパラレルに論じた。

平成 17 年 7 月 6 日

衣服内気候・靴内気候に関する研究

元本学教授 三ツ井紀子

衣服の重要な機能の一つに体温調節の補助がある。衣服を着脱することにより寒暖を調節し、衣服内を快適に保っているため、衣服は人体に最も近い環境といえる。快適な衣服環境を知るため、衣服着用による熱、水分の移動について、衣服材料の組成や組織、およ

びそれらの物理的性能と関連付けて研究してきた。

各種素材を用い人工気候室において着用実験を行い、運動負荷による発汗時の衣服下気候について検討した。被験者の発汗感覚、衣服の濡れ・湿り感覚、温冷感覚、快適感覚などの主観量と、生理量としての口腔温、平均皮膚温、発汗量、衣服上と衣服下の温度・湿度、皮膚上と衣服上の濡れ面積率、衣服下環境での水分量などの客観量とについて、相関を求めるなどして比較検討した。羊毛と脱スケール処理羊毛、吸水性綿シャツと撥水処理綿シャツ、レギュラーナイロンと吸汗・吸水性ナイロンなど、衣服素材による着用快適感への影響について述べた。

また、これまでの研究を靴に応用し、牛革、合成皮革、人工皮革など靴構成素材、靴の種類、デザイン、靴開口部を変化させた場合の、靴内気候による着用快適感への影響について説明した。さらに、産学連携で行ったレインコートや靴の研究についても触れた。

快適な衣服内気候、靴内気候の研究には、衣服や靴の組成、組織、表面特性、物理的性能、環境温度・湿度、衣服下水分量、靴内水分量など多くの要因が影響していることを示した。

平成 17 年 12 月 7 日

ユーザビリティ その概念と最新動向の紹介 生活環境学科専任講師 細田彰一

近年、ユニバーサルデザインをはじめとして、ユーザのことを考えたモノ作りの機運が社会的に高まっている。その中で、最近、モノ作りの手法として注目されているのが、ユーザビリティである。

本発表では、ユーザビリティの現れた背景から、現状どのような研究開発がなされているかについて報告を行った。

20 世紀半ばに生まれた人間工学は、20 世紀後半に、作業環境や製品デザインの安全性、使用感の向上に多大な貢献をした。しかし、人間工学は、出発点が作業の効率化であるため、どうしても感性など人の多面的な部分の追求に用いるには向いていない。それを補うものとして、感性工学や、生理的指標が用いられたが、人間工学とは必ずしも融合するものではなかった。また、1980 年代から普及したパーソナルコンピュータや 1990 年代に普及したインターネット、これから普及するであろうユビキタス環境など、これまでにないほど複雑で、物理実体のないものに対してどう取り組むかが焦点となってきた。そんな状況で、心地よく使いやすいものを効率的に制作するにはどうしたらいいかについて、ソフトウェア業界から提唱されたのが、ユーザビリティである。

ユーザビリティは、手法などは人間工学と共通する部分もあるが、一番の違いは、人間工学ではあまり扱われることのなかった、「満足度の度合い」「利用品質」(ISO 9241-11 で定義)を標榜することである。これにより、より広い意味で、人間にあった環境の開発への応用が可能になった。

近年、ユーザビリティは複数の ISO でも取り上げられ、ソフトウェアだけでなく日用品の開発にまで応用される幅広い概念「人間中心設計」に昇華したと言える。日本では、昨年、ユーザビリティの普及とサポートを目的とした NPO 法人「人間中心設計推進機構」が発足し、活発な活動を開始している。最近の動向としては、ラピッドプロトタイピングやペーパープロトタイピングという開発環境のパラダイム変化に対応して、なるべく早期にユーザビリティ品質を向上させるための研究や、シナリオを活用した要求定義法の研究

が全世界で行われている。日本でも、2001年から始まった文部科学省の知的クラスター創成事業「札幌ITカロッツェリア」をはじめとする産官学共同プロジェクトが行われ、成果をあげつつある。

今後、ますます複雑になる環境に対して、いかに確実に、使いやすいものを作ることができるかについて、さらなる発展を望む次第である。

平成 17 年 12 月 7 日

脂肪汚れの洗浄性について

生活環境学科助手 金 井 千 絵

衣服に付着する脂肪汚れは多いが、不溶性のため家庭洗濯では十分に除去できないのが現状である。このため、脂肪分解酵素「リパーゼ」が市販洗剤に配合されている。これまで水晶振動子法を用い、脂肪汚れの除去に対する脂肪分解酵素の効果について調べた結果、界面活性剤の存在下で酵素を添加すると、界面活性剤のみ、酵素のみよりも脂肪が除去されやすいことがわかった。

本研究は、これらの実験を基に、実際の洗浄系に近い汚染布を用いた実験を行い、脂肪汚れの洗浄性を評価するために、実験に使用する人工汚染布を自製する方法について検討した。人工汚染布は洗浄効率を評価するものとして各種のものが考案されているが、脂肪の除去を迅速・正確に除去することの出来る汚染布は市販されていない。今回、脂肪を着色する物質として油溶染料を用いたが分散させることが難しく、均一な汚染布を得るためにあらかじめ脂肪と油溶染料を混ぜ、四塩化炭素に分散させた液を滴下して汚染する方法を用いた。この自製の汚染布を用い洗浄した結果、かなり低い洗浄率しか得られなかったが、水晶振動子法と同様に界面活性剤・酵素の共存下においてわずかだが洗浄率は高くなった。さらに汚染布の自製方法について検討し、脂肪の除去に効果的な酵素、及び他の洗剤成分の配合条件について追究したい。